星に願いを

目次

Everuy day and night,.....7
宇宙の片隅.....11
軌跡.....15
二つの影.....18
流星群.....22
This is my love.....25
一日の終わり.....27
明日は来るから.....28
街の光.....31
君のいない夜.....33
with you.....35
Wish upon a star.....36
Begin.....39
あなたに届けたい流れ星.....44

When You Wish Upon a Star

When you wish upon a star
Make no difference who you are
Anything your heart desires
Will come to you

If your heart is in your dream
No request is too extreme
When you wish upon a star
As dreamers do

Fate is kind
She brings to those who love
The sweet fulfillment of
Their secret longing

Like a bolt out of the blue
Fate steps in and sees you through
When you wish upon a star
Your dream comes true

Music by Leigh Harline
Words by Ned Washington

☆

「ピノキオ？」

聞き返すと、その人は私の言葉を繰り返し宙に浮くモニタを引き寄せた。木の身体で、糸に吊られた鼻の長い人形の絵に見入る。目がくりくりと大きくて、何故だかとても鼻が長い子どもの人形。

「ピノキオは、嘘を吐くと鼻が伸びてしまう。嘘を重ねて鼻が伸び、それでも嘘を吐くことをやめられない」

こんなに鼻が伸びてしまうなんて、どんな嘘を吐いたのだろうか。私は聞こうとしたのだけれど、その前に彼の言葉が部屋に響いた。

「悪いことだと、分かっているんです」

その声で私は自分の両手を胸の前で握った。糸が切れ、長い鼻を左右に振って涙を流す操り人形が動く姿が目に映る。

「嘘を吐いて、誘惑に弱く、父親のゼペットに苦労ばかりかける」

今までこの人に聞いてきたお話は、綺麗で素敵だったのに。今日はどうしたのかと私は不安にな

る。何かあったのだろうか。それとも、あまりに何も起こらないからだろうか。
「彼は、星に願う」
長い指が魔法のように開いたウィンドウ。部屋の天井を埋め尽くすほどの長方形には星が。でもこの星の姿は。
「地球の星空…」
これは地球で見た星の色。星の数。星の並び。姫様と一緒に見た、地球の夜。もう一年以上も前のこと。あの時は知らなかった。地球の空がこんなに綺麗なものだということ。
「ピノキオは人間になりたいんです。良い人間に」
星空がゆっくりと移動して、音楽が何処からか流れ出す。初めて聞くのに、どこか懐かしい。ゆったりとした音の繋がり。私は、その星と歌に心を奪われた。ただじっと耳を澄ませて、黒い天井を巡る星の動きを眺める。

If your heart is in your dream,
No request is too extreme,
When you wish upon a star,
As dreamers do.

「星に願いを」

歌の合間に優しい声が紡いだ言葉とその意味を、私はずっと覚えている。

あなたは今、どんな星を眺めていますか。

Everuy day and night,

地上から吹き上げる風に目を瞑る。春とは名ばかりの冷たく刺すような風。開いた目は沈みゆく太陽の残照に赤く焼かれる。

一日の終わり。空を見上げこう思う。こんなに僕の目に映る星の数は少なかったろうかと。日が沈み暗闇のカーテンが地球の天井を覆っても、見える星は数えられると思うほど。その理由は眼下にあるのかもしれないが。暮らしの灯。一つ一つの光の下には人がいて、そこには生と未来と夢。まだ見ぬ明日の希望が宿っているのだろう。

もう一度空を見上げる。星は見える。でも、まばらだ。小さい頃にお父さんと見た星空。火星から見た星空。揚陸城から見た星空。月で見た星空。そして、地球で今見る星空。全て違った。綺麗だった。安堵した。いつしか怖くなった。冷たい色だった。燃える温度だった。射貫かれるほど遠くから光った。しかし最も多くの星を感じその光に孤独を強めたのは、機体と共に泳いだ星の海であったろう。

「スレイン」

呼ぶ声は暗闇から。帰宅して電気もつけないで、こいつも相当変わっている。僕ほどではないか

もしれないが。
「何だ？」
伊奈帆がサンダル履きで近づいてきた。
「天体観測？そんな薄着で、風邪ひくよ」
肩に毛糸編みのカーディガンが乗った。軽いが重い。僕にとって、何かを纏うというのはどうも落ち着かないのだ。特にこういう羽織るものは。素肌の首に鬱陶しい毛糸の感触を我慢していると伊奈帆が思い切り顔を顰めて僕の名を呼んだ。
「裸足？」
昔はこうでもなかったのだけれど、監獄での習慣だろうか。靴下も袖もごわごわして心地が悪い。ベランダくらいなら、サンダルなどあってもなくても構わないと思った。しかし伊奈帆はそうではないらしい。それはそうか。こいつは寒がりだ。冬の終わりとはいえ薄着と裸足は見るだけでも不快なのだろう。
「寒くないの？」
質問の連続。それも、今更なことばかり。
「寒くても僕には関係ない」
もう死んだ人間だ。この身を守る必要もない。

「あ、流れ星」
言われて振り向く。光は消えた後だった。
「流れ星に三回」
口に出してから思う。どうしてこの男にこんな話をしているのだと。伊奈帆は少しだけ左右の眉を持ち上げて意外そうな表情をしたが、何も言わずに続きを待っている。
本当にこいつも変わったやつだ。
「流れ星が落ちる前に願い事を三回唱えると、叶う」
伊奈帆がベランダの手摺りに肘をついて凭れた。彼の視線を追って、僕も上を向く。
「君はそれ、やったことあるの？」
しばらくしてから吐く息を白くして、隣で伊奈帆がそう言った。
「忘れた」
多分、遠い遠い、まだ地球から見た星しか知らなかった頃。気まぐれに何かを祈ったことはあったろう。でも、今ではどうしても思い出せない。何を願ったのか。何を祈ったのか。記憶を辿っていると隣の白い息が音を乗せた。
「僕はね、したことあるよ」
顔を向けると目が合った。珍しく口元に笑みを浮かべ、明るい瞳で僕を見ている。

「ちゃんと三回。流れ星が消える前に」
空には点々と小さな光を放つ星々。地上が幸せな光を放つほど、星の光は掻き消える。流れ星の強い光でないと、人の目に映ることも敵わないんだ。
「何をお願いしたんだ？」
この現実的かつ合理的な男のそんな姿を想像できなくて聞いてみた。すると伊奈帆は内緒、と言って腕を伸ばして伸びをする。
「願い事は人に話すと叶わないって言うし」
振り向き部屋に戻る背中に続く。暗い室内との境界に足を踏み入れる前、ふと振り向いた。
流れ星は見えない。

宇宙の片隅

「レムリナ姫。流れ星は、星ではないんです」
「え？」
画面から顔を上げ、彼の顔を見る。スレインは眉尻を下げた微笑みを浮かべ、そうして一つのモニタを引き寄せた。今のは私が二番目に好きな彼の表情で、気を取られ口を開いた自分をたしなめる。
「流星体です」
膝をついた彼の視線は、座る私の少し下にある。見下ろされることの多い人生ではあるけれど、こんな所作一つ取っても彼はそれを理解してくれているのが分かる。だから嬉しい。
それはごつごつした岩のようなものに見えた。私は先ほどまで見ていた美しい光とその正体を見比べて、不思議に思ったことを聞いてみる。
「星ではないのに、どうして流れ星と言うのですか？」
スレインは視線を硝子の向こうに向けた。話し出す前の静かな横顔。その美しく澄んだ遠い目が私は一番好きだ。そこに私が映っていなくても。

視線の先には、深淵を針で突いたような不規則で無数の光。
「地球で見る星は、今見える星よりずっと遠く小さい。時間や季節で見える星が違います。地球では明るい星々を結び星座を形作り、物語が生まれました」
「星座？」
見える星が違う、というのは不思議なことだ。それに、それを結んで形を作るなんて。手も届かない星の輝き星の並び。隣で見ていても、同じ星を見ているかなんて分からないのに。
「ペルセポネーという、美しい少女がいました」
スレインがまた一つ新しいウインドウを開いた。黄色の花。絵本で見る星のような形。
「ペルセポネーはある日、水仙の花を一輪摘もうとします。すると大地が割れ地の底から黒い馬に乗った冥府の王ハデスが彼女を連れ去ります」
「冥府は死後の世界なのではないですか？彼女は死んだのですか？」
「いいえ。冥府でペルセポネーはハデスの妻となります。彼女は冥府の王を拒みましたが、丁重に扱われたことと、空腹から与えられた柘榴の実を食べてしまいます」
「柘榴？」
また新しい薄い光の板、今度は赤くて丸い木の実。断面に血のような色の小さな粒が詰まっていて、見た瞬間に気持ち悪いと思ってしまった。

「冥府の物を口にすることは冥府に属した証となり、ペルセポネーは差し出された十二の柘榴のうち食べた六つぶんを地の底で過ごすことになった」
これを食べるの？
ぞっとして、私は膝の上で重ねた両手を握った。スレインが少し心配そうな顔で私を見る。気に掛けてもらうのは嬉しいけれど、この顔は嫌い。同情とか哀れみとか、そんな感情は欲しくないから。
「地球の季節の神話です」
「季節？」
「春。夏。秋。冬。暖かい空気。暑く、眩しい太陽の光。冷たい風。雪という、氷の欠片。地球には、温度と色の違いがあるのです」
幾重にも並んだ美しい画像の向こう、青い球体を私は見る。あの青は海というもの。あの白は雲というもの。土というもの。風というもの。太陽の光。星の光。
「ペルセポネーは芽吹きの女神。実りを願う人々の作ったお話です」
木の実。花の後にできるもの。それを食べる。実を食べ、葉を食べ、根を食べ、そして生き物を食べる。地球のくらし。地球の仕組み。
「ここから見る地球は美しいけれど、あの赤い実を食べるのは少し怖いわ」

歯で突き破る果肉から滴る汁を想像して、不機嫌な声が出てしまった。スレインは穏やかに微笑み、数日前から素肌を見せるようになった指先で柘榴の写真を閉じ、水仙を閉じた。彼の爪の形を何故か目が追ってしまう。爪の形。指の形。手の甲。手首。赤い袖口と灰色の布地の下の見えない素肌の腕の形を想像して、私はこんなにはしたないことを考える女だったかしら、と聞こえないように細く長いため息を吐き出した。

「初めてのことは、誰にだって怖ろしいものです」

そして一枚一枚消えていく美しい地球の空。

「あまりに違いますから」

独白のような声と同時に消えた最後の一枚は、緩やかな弧を描く流星体の光線。

軌跡

「流れ星だ」

おそらく同じものを見ていた。大気圏の一瞬の光線。それを見ての言葉だろう、通信機越しの指示を伴わないこの声は。しかし理由が分からない。

「流れ星とは、何ですか？」

あれはどう見ても星ではない。岩石の欠片や塵が大気にぶつかり燃えているだけのことだ。その大きさだって、この手に百も乗せられる小さなもの。

「地球の戯言だ」

地球。そっけない返答を繰り返す。この方の生まれた場所。地球には、色々なものに色がついているのだと言う。海という水は青。大気は透明。空は青く赤くそして黒いと。黒い時間には月やカタフラクトから見えるように星が見えるが、青い時間と赤い時間には星は見えないのだと聞いて驚いたものだ。見えないものに名前があり、見えるものが見えなくなる。それを毎日繰り返す。変化に満ちた世界に生きる人類の存在を知る。だからだろうか。この方の話が、美しく静謐に私の胸を打つのは。

長い航路に辟易していたのか、スレイン様は通信を開いたまま穏やかな声で語り出した。
「地球から見る流星体は、星が降るように見えるんだ」
姫様や侍女に地球について話すのを、私も断片的に聞いたことがある。自分のような軍人にさえ、脳裏にまだ見ぬ地球に淡い憧憬を抱かせるような美しい言葉と写真。感受性豊かな少女たちにはどう聞こえているか、想像に難くない。今はこの方の語る美しい世界を自分が独占していると思うと、何とも贅沢な心地になる。
「一瞬で消える儚い光。地球では、様々な言い伝えがある。願い事を三回唱えると叶う。誰かの命が消えようとしている。そして」
カタフラクトのジリジリという微細なノイズ音に柔らかく低い声が反響する。地球にぶつかる流星塵の消え去る様子が何度か目視された。
「流れ星は、天の扉が開いてこぼれた向こうの光だと」
また一つ、欠片が燃え尽きた。
「天の扉ですか？」
うん、とくぐもった返答。天の扉。ハイパーゲート。アルドノア。王族。月。火星。地球。そんな面白くもない単語だけがつらつらと思考を上滑りしていった。
「天の扉の向こうにいるのは誰だと思う？」

優しい語り口に背筋がすっと冷えた。今この方は何を見ているのだろうか。そして、何を想っているのだろうか。もう、同じものを見ているとは思えなかった。

「王、ではないでしょうか」

思ったことを口にすると、息を呑む気配と乾いた笑いが返ってきた。少し怖い。この人も、このまま流星体のように燃え尽きてしまわないだろうかと。放つ光の神々しいまでの輝かしさは一瞬。伸ばした手も届かない光の軌跡。

「お前らしい。ハークライト」

いつもの声音に戻っていた。少し休め、という指示。もう話は終わったらしい。

「…扉の向こうで目を閉じているから。僕の願いを分かりはしないんだ」

回線が閉じた。数語の語りを胸に置き、私は静かなコックピットで漆黒の宇宙に開いた星の穴を見る。地球に落ちる塵の刹那の流線を目で追う。扉など見えない。見えないものを見ようと目を凝らし思考を凝らす。無音の宇宙で扉が静かに横滑りに開く。

天の扉の向こうに、チューブで雁字搦めになったタンクが見えるようだ。

オルゴール音が止まり、吸い込んだ息をゆっくり吐き出す。そして話が終わる瞬間の静かな空気を吸う。こうして私の胸が優しく透明なもので満たされて、いっぱいになったのを少しだけ逃がしてあげるのが好き。全部独り占めするより、次がもっともっと楽しみになるから。

スレインは小さな箱を両手の中に収め蓋を閉じた。いつの頃かも忘れてしまった、私に贈られた誕生日プレゼントの一つ。古びた木箱を彼に見せたのは木で作られた箱だったから。地球の植物を削って組んだ綺麗な箱。その箱は彼が少し触った途端に歌い出したものだから、私は驚いて歓声を上げた。ああ、こうやって使うのか、と私に贈られた意味を知った。誰がくれたかもう忘れてしまったけれど、箱の中身が歌だなんて、本当に素敵。

「綺麗な歌ですが、どうして星に願うのですか？」

分からないので聞いてみる。私は分からないことをそのままにするのが苦手で、つい何もかも聞いてしまうのだけれど、スレインは一番よく聞いて、一番よく考えて、一番綺麗な答えをくれる。

「星に願いを。地球では、流れ星にお願い事をすると願いが叶うという言い伝えがあります」

「流れ星って？」

また聞いてしまう。こんなに聞いてばかりで呆れていないかしら、と思うことも時々あるのだけれど、スレインはいつも笑顔で頷いて話を始めてくれる。優しい顔。優しい声。優しい眼差し。だからかしら。私の聞き癖が直らないのは。

「彗星の通り道には欠片が集まっています。それが地球に飛び込むと光るんです。地上から見ると、まるで星が流れ落ちたように見えて。だから流れ星といいます」

「流れ星…」

スレインが箱の螺子をくる、くる、くる、と巻く。白い手袋に覆われた指先。こんなもの、どうして彼一人が着けるようになったのかしら。

「流れ星は、前に聞いた雨や花のようにたくさん落ちてくるのですか？」

「いえ。一晩中眺めていても見えないこともあります。見えてもすぐに消えてしまうので…だから、見られたらお願いするんです」

「そうなのですか」

でも、それって星ではないんじゃないかしら。彗星の欠片と言っていたし、そんな大きなものがぶつかったら地球が凹んでしまうわ。それを星が流れ落ちるなんて。本当に不思議。地球って不思議で、やっぱりとても素敵だわ。

スレインが螺子を巻いたオルゴールをどうぞ、と両手に乗せてくれた。木の柔らかい感触を持ち

上げると、箱の中から音がこぼれ出る。
「流星群」
スレインの声。オルゴールの一音一音を包むような声で紡がれた美しい言葉を声に出さずに繰り返す。流星群。
「毎年地球では…誕生日やクリスマスみたいに、決まった時期にたくさんの流れ星が見られるんです。流星群と言って」
———When you wish upon a star　Make no difference who you are.
「その時は、桜の花びらや赤く染まる木の葉。そして雪のように、いくつもの流れ星が空から降ってきます」
———When you wish upon a star　As dreamers do.
「その星に触ることはできるのですか?」
———Fate is kind,
「えっと…地上まで落ちる前に燃え尽きて…。多分、消えちゃいます」
———She brings to those who love,
「そうなのですか」
———The sweet fulfillment of,

「寝転んで見ると、きっと綺麗だと思います」
素敵な思いつきに私はくすりと笑った。
「おじいさまに叱られてしまうかもしれませんね」
私はオルゴールの蓋を閉じる。まだ曲は少し残っているけれど。全部聞いてしまうのは勿体ないわ。スレインの声も、笑顔も、次の約束も、箱の中に仕舞っておきましょう。
いつか、ドレスをたくし上げて裸足で地球の大地に寝転ぶような。そんな願いを祈ってみたいわ。
「スレイン。明日の授業も、よろしくお願いしますね」
スレインが嬉しそうに、寂しそうに私を見る。私はその碧の瞳を見返す。見つめる。もう少し。あと少しだけ。ああ、何て綺麗な色かしら。あの惑星のように。
残り少ない二人一緒の明日だけれど、全部じゃなくていいの。毎日少しだけ取っておきたいの。
「はい」
会えなくなった時のために、残しておきたいの。私か貴方が言ったかもしれない本当の言葉を。

———Their secret longing.

流星群

「ペルセウス座流星群だって」
朝食の席で伊奈帆がテレビのコメントを鸚鵡返しした。ちらりと見ると、画面には天体観測への丁寧なアドバイスがありがた迷惑に表示されている。
「見に行こうか」
意外な申し出を、口に含んだ茶を飲み下すまでの間思案する。
「いいけど」
が、意外な申し出しかしない男の言い分を思案するだけ時間の無駄だと思い直した。
「決まり」
それだけ言って、伊奈帆はごちそうさま、と速やかに食器を片付け身支度を終わらせた。
「いってきます」
「いってらっしゃい」
片手を上げてダイニングを立ち去る後ろ姿。機嫌が良さそうな足取りだ。時計を見ると午前七時。彼が再びこの部屋に入室するまで約十三時間。一人で過ごすこの白昼が、僕は一番嫌いだ。アイツ

がいるから嬉しいとか、いないと寂しいとか。決してそういうわけではなく単純に一人だと思考の迷路で自分を見失い、気を抜くと袋小路から帰って来られなくなるからだ。前はそれでもいいと思っていたけれど、最近はせめて伊奈帆が帰ってくるまでには自分を取り戻しておかないと後々いろいろ面倒だと思い至った。これ以上借りを作るのも癪だし、抒情的な言い方をすれば悲しませたくはない。喜んだり、怒ったりはいい。でも悲しいのだけはどうにも嫌だ。あいつの悲哀は無防備すぎて堪えられない。界塚伊奈帆は見た目よりずっと感情が豊かだし、純なところがある。人並み以上に喜怒哀楽を感じているあいつが、コミュニケーションの手段として表層にそれを出さないのは元からかそうならざるを得なかったのかは分からない。些細な表情の変化が読み取れるようになるとよく分かる。嬉しいと口と目が笑う。怒ると眉間に皺が寄る。気楽な顔は年相応で、冗談だって言うやつだ。下手だけれど。

でも悲しい時だけは、何も出さない。あいつは自分を閉じ籠める。能面に鍵をかけてやり過ごす。底へ底へと沈めていく。そうして沈んだものはどれほど心中に降り積もっているのだろうか。

そういう時は、泣けばいいのにと思う。泣き顔を見られたくないなら、一人になって泣けばいい。泣いて喚いて、変わらない現実に絶望して。死にたい、やめたい、逃げ出したいと声の限りに叫んで。誰にも気づいてもらえなくても無駄なあがきでも、そうでもしないと。心が折れる。折れた心はもう戻らないから。どれだけ添え木をしても布を巻いても薬を塗っても言葉をかけても、元の通

りになりはしない。

そうなって欲しくはない。いつからかな。こんなこと思うようになったのは。

流しで茶碗を洗う。泡塗れの食器洗いのスポンジで、食事の形跡を消していく。僕は食べる。植物の実も、葉も、根も、生き物の肉も。僕は生きているから。生きるってことは、殺すってことだ。もう殺したくないと思った。食べなくなった。でも今は食べている。切って焼いて、口に入れる。咀嚼して嚥下、消化、吸収。排泄。サイクルを繰り返す。飽きもせずにそれを何万回も繰り返す人間。僕は人間なんだ。鳥でもなければ狼でもない。飛べもしないし牙はない。地を這う地球人。

時計を見る。午前七時九分。

願う当てのない流星群まであと十二時間と五十一分。

This is my love.

あそこにいたのだ。自分は。自分たちは。

地球というのは何から何まで違う。月とも火星とも、カタフラクトのコックピットとも。あんなに小さいものだったか、自分達が守ろうとした居場所は。あんなに遠いところにあるのか、星の海は。そう思いを馳せ、格子の向こうの夜空を見上げる。頬を通り過ぎる、これが風。吸い込む空気、これが大気の温度。光って消える。これが流れ星。あの方の言った通りだ。地球から見ると星が落ちてきたようにも見える。こんなに星が降ってしまったら、空から星が無くなってしまうのではないかと思えるくらいだ。

降る星を生んだ氷の星。ほうき星とも名付けられた、太陽系の外からやってきた異物。太陽に近づき軌跡を燃やすコメット。その輝かしい光と軌道を誰が忘れ得るだろう。見る者の目に焼き付き、耳を打つ残響。小さな無数の欠片が大気に焼かれまた光る。最後に命を燃やし尽くすように。

あの彗星を追い掛けた。光と速さに心を奪われた。今思い出すのは、あの背。自分より小さく薄いはずなのに、どこまでも大きく猛々しい気高く赤い背中だ。

これまで何度も願ったことはある。そのうちのいくつかは、過去確かに現実となった。今はもう

なくとも、消滅しても届く光年先の星の瞬きのように。
しかし、祈ったことは未だない。地球の言い伝えでは天の扉の向こうにいるのが何なのか、結局聞きそびれてしまった。でもいい。自分にとっては扉の向こうにいてその扉を開いてくれたのはたった一人。星降る夜にその扉が開いているのだとしたら。
「スレイン様…」
届くなら、この空の下に貴方の欠片が降り積もり、いつしか地球を満たすように。

一日の終わり

夕食を片づけた後、伊奈帆がエプロンを外してそう言った。時計を見ると十九時五十三分。彼は今日、いつもより一時間早く帰宅した。真っ暗な部屋にガチャリと開錠の音が響いた瞬間、安堵を感じた自分に驚き呆れる。

「行こうか」

「ここで見るんじゃないのか」

「せっかくだから、よく見えるところに行こう」

外出は許可されている。しかし、滅多に僕は外に出ない。必要がないから。どこにいても同じだ。塀の中でも外でも、僕の心臓が動いていることには変わりはないし天体の運行も変わらない。

「はい」

手渡されたジャケットはまだ一度も袖を通していない。真新しい繊維をひと撫でして玄関に向かう伊奈帆の背を追いかける。

「お月見ですか。レムリナさん」
言った後であまりに不躾だったか、と思ったが、彼女は気にした風もなく軽やかに髪を揺らして首を振った。
「星を見ています」
「ああ。今日は流星群ですね」
屋上の手摺りに手を置いて夜空を見上げる。この場所なら、民家の明かりも気にならない。すぐに一つ、また一つと流星が確認できた。耶賀頼先生、と少し鼻声の可憐な声が私を呼んだ。不思議そうな声音に振り向く。普段は見せない年相応のあどけない表情で首を傾げた。
「流れ星は、星ではないのでしょう？」
彼女は車いすの背に凭れ、夜空を見上げていた。
「そう言われれば、そうですね。よく知っていますね」
少し笑ったようだ。彼女の笑顔を見る事は稀であるから、私も思わず笑みが浮かんだ。
「以前、親しい地球の方に教えていただきました。星座があることと、ペルセポネーという女性の

お話」
彼女の素性は秘密が多い。その地球人が誰なのかと無責任な想像が次々浮かぶが、彼女の顔を見ているとそんな思考も消えていった。
「その人は、星が好きなんですね。ペルセポネーなんかは、僕からは出てきませんよ」
星空を映す遠い目は、見えないものを見ているようだ。少女の孤独を慰め癒したであろう物語は、彼女の一部となって今も生きている。
「星も。海も。空も。花も。そこに住む生き物も好きな人でした。私はあの人の話を聞いて、地球が好きになりました」
彼女の瞳が重なる。生まれながらに特異な能力を持ち得てしまったもう一人の少女と。空の青と海の青。今、青空に映り込む星空の彼方には何があるのだろうか。
「流れ星が消えるまでに三回願い事を唱えると、願いが叶うそうですよ」
レムリナは目を見開いて身を乗り出した。
「本当ですか？」
「はい。願掛けです」
彼女は両手を胸の前で組み、一心に流れ星に目を凝らす。昼の空の色の瞳に、星屑が次々宿り瞬く。そのくらい、彼女の瞳は輝いた。おそらく希望や未来に対して。

神話のペルセポネーは、冥府の王を愛したのだろうか。彼女の冬は、凍えるばかりでしかなかったろうか。

きっと違う。星を見つめる月の少女を見て思う。

どこにいようとも、彼女は彼女であったのだ。そうでなければ不在を憂う花々が、ああも儚く散るはずがない。

「その人も、同じ空を見ているといいですね」

彼女の瞳の中の星空から、涙が花びらのようにはらりはらりとこぼれ落ちた。

街の光

「寒くない？」
往来で伊奈帆が聞いた。人波に流れ歩みを進める無言の道中、僕は地面の模様から顔を上げる。伊奈帆は顔を前に向けたまま気配を寄せた。
「別に」
調子は？食事は？眠れた？寒くない？こいつとの会話は疑問符が多い。それも、僕に関することばかり。僕の生存を確かめる質問に、まだ僕は彼の望む答えを返すことはできていないのだろう。今もそう。だって僕には、自分のことが一番分からないのだから。
「僕は寒い」
そう言う伊奈帆は肩を竦ませてどこか窮屈そうな歩き姿であったので、本当に寒いらしい。ふと気づく。こうして、僕への質問のあと自分のことを言うようになったのはいつからだったか。面会室か。独房か。今の暮らしが始まってからだったろうか。そんな些細な言葉が一つ一つ降り積もって、界塚伊奈帆という男は僕の胸中で再構築される。
敵。軍人。駿馬を駆る軍神。地球の英雄。隻眼の青年。理屈っぽい。無口に見えて話好き。合理

的で情緒がなくて、存外寂しがりの子ども。料理が好きで、買い物が好きで、家事は手早い。挨拶をし、返事を求める。無表情に近い顔面は慣れると感情を素直に映し、決して涙の気配を見せない。

いつの間に、一つ年下の同居人にこんなに沢山言葉が出てくるようになったのか。

「星が見えないな」

取り留めない思考に戸惑い、空を見上げそう言った。青味がかった夜空の星は雲もないのに霞んで見えない。

「光が多いからね」

昨日見下ろした街の光は、歩くと眩しさは身を焼くほど強く多い。光の中には人がいる。仕事。家。帰り道。行く道もあるだろう。人の居場所は煌々と夢や愛、そして希望を宿した光で街を生み、星の光は届かない。星に願いをかけるまでもないのか。願うものは光の中にあるのだから。

「まだ結構歩く。疲れてない？」

「平気だ」

オレンジと黄色の光に照らされた横顔が上を向く。隻眼が眩しそうに細められた。

「遠いけど、ここよりずっと暗い。綺麗だと思うよ」

君のいない夜

「アセイラム？」

声を掛けると、夜の闇の中スカートがふわりと翻った。私の美しい伴侶は長い髪を背にはらいのけ、小首を傾げる愛らしい仕草で微笑む。開け放たれた大きな扉は寝室から繋がる庭。人工の床に地球の土を敷き、草を植えた見せかけの大地だ。

「クランカイン。今日は流れ星が見られますよ」

「流れ星？」

どうやら部屋に戻る気はなさそうだ。私も室内履きのまま庭に降りる。彼女は空を見上げて胸の前で手を組んでいた。月と星の淡い光を浴びて女神の彫像のように美しい。しかし私は気が付いた。

「素足では、傷を作りますよ」

アセイラムは目を閉じ私の言葉に応え、次に薄い部屋着のまま膝をつきそして背を地面に投げ出した。私はこれには驚いてしまい、そうかと言って駆ける言葉も見つからず、しばらく茫然と彼女の寝姿を眺めていた。美しい微笑み。美しく組んだ手の形。美しく土に横たえられた足の形。

立ったまま見下ろしているのも具合が悪いので、彼女の肩の近くに膝をつく。土の凹む感触を受

け、居心地悪く彼女の言葉をじっと待った。しかし大きな瞳に夜空を映すばかりで、どうやら私のことなど目には入っていないらしい。

「流れ星とは、何ですか？」

話題に困って、先程彼女が言った単語を聞いてみる。瞼が一度夜空と瞳を遮った。長い睫毛の落とす繊細な影を私は見下ろす。

「流れ星に願い事をすると、願いが叶うそうです。あ、見えました」

一つ、二つ、とアセイラムは指を天に翳す。私は彼女の示す方向に目を凝らす。あの、光って消える彗星の残骸のことだろうか。確かに、星と言いたくなるかもしれない。周囲の星々は緩やかに移動しており、それぞれと似通った光であるから。

「こんなにたくさんの流れ星を見られるのは、一年に数度だけ。待ち合わせをするように、決まった時期にやってくる願いの日」

次、そして次と燃えては消える流星塵を数える妻は初めて見る表情をしていて、魅了されつつもどこか心がざわついた。どこを見て、何を想っているのだろうか。

「何をお願いしたんですか」

アセイラムは微笑みを浮かべ私を見上げた。そしてまた光の消失に心をやってしまう。

そっと触れた肩は薄く汗ばんでいて、土と草の匂いがした。

with you.

草の匂いと土の匂い。吸い込む空気の温度は冷たく湿っている。低い風が脚の短い草を波のように揺らした。僕らは何も言わずに歩く。坂道を上る。随分長い間、僕は彼の背を見て足を動かした。冬なのに汗が肌を濡らし、指先の感覚はないのに腹が熱い。心臓が早足に動いて、酸素が体内に行き渡る感触。肉体の変調に、単純なことだけれど僕は生きているのだな、と思う。

「スレイン」

伊奈帆が肩越しに振り向く。暗くてどんな顔をしているのかは分からないが、声は微かに弾んでいた。彼の背後に地面はない。そうか、ここが天辺だ。

「あと一歩。ここに来て」

言葉とともに差し出された手。素手だ。この寒がりが手袋もせず、冬の夜更けにこんなところまで。

「ああ」

僕はその手を握った。指先は固い。掌は熱い。

Wish upon a star.

Fate is kind,
She brings to those who love,
The sweet fulfillment of,
Their secret longing.

「美しい歌ですね」
クランカインの言葉に私は微笑む。彼はいつも優しい。当たり前のことを当たり前の言葉で言ってくれる。私もこの歌を美しいと思う。同じものを美しいと感じる人が隣にいる。それはきっと幸せなこと。
「オルゴールを、持っていました」
「オルゴール？」
瞼を閉じる。見えたのはぜんまいを巻く白い手袋。開いた蓋の中の空っぽ。
「小さい頃は使い方が分からなくて。初めて曲を聞いたのは十五歳の頃でした」

彼の手の中で息を吹き返した地球の植物の一片。美しい歌と、美しい物語。あの時、歌も言葉も最後まで聞かなかった自分のことを可愛らしいと思う。今なら、きっとお終いまでせがんで彼を困らせてしまう。もうこれが最後だと知っているなら、二度と会えないと知っているなら、残さず全てを欲しくなってしまう。

大気の中で見上げる星空は、大気の外から見下ろす星空よりずっとずっと遠く、涙が出るほど綺麗だった。

流れ星。星ではない宇宙の塵。

空。青いのは、レイリー散乱。

海。水は辛くてとても飲めない。

風。この素肌に冷たく触れる。

美しい地球は、どうしてこんなに悲しいのかしら。寂しいのかしら。どうして星がこんなに瞬くのに、夜はこんなにも暗いのかしら。割れた月はどうしてあんなに淡く優しいのかしら。

彼の髪の色を想い、目の温度を感じ、手の柔らかさを噛み締める。手袋越しに重ねたあの手は、風に攫われる羽を守るように私の手を包みそして離れた。

「今の歌は、そのオルゴールの中に詰まっていたのですね」

まるであの人のような言葉が耳に聞こえ、私は未来を共に歩く青年を見上げた。立てた片膝に肘

を乗せ、私の隣に佇む彼は私ではなく光を放つ数多の塵を見ていた。
地球の空は、確かに星を降らせる。一年に数度。思い出と待ち合わせをするように。
「流星群というそうです。クランカイン」
本当かどうかなんて、もういいの。儚い光に願いを込めた美しい名を告げ、私は宝石箱に大事に仕舞っていた歌の続きを唇に乗せる。

Fate is kind
She brings to those who love
The sweet fulfillment of
Their secret longing

Like a bolt out of the blue
Fate steps in and sees you through
When you wish upon a star
Your dream comes true

Begin

星などもう見えない。そう思った数時間前の諦観を塗り替える流星群の瞬きに、僕の古ぼけた記憶がふと零れ出た。仰向けで顔を横に向けると、逆さの横顔が天を見ていた。穏やかな呼吸と眼差し。

「小さい頃。一人で星を見た」

こいつといると、思い出なんてものが僕にもあったことを思い出す。お父さんといた頃。姫といた頃。あの頃の僕は幸せというものを知っていた、と思う。愛とか、夢とか、希望とか。そういうものが自分にもあって、望めば叶うと無条件に信じていた。

「流れ星が消えたらどうなるのか、なんて考えて。星の欠片はきっと、順番に落ちてくるんだと思っていた」

伊奈帆は小さく相槌を打ちつつ、僕の言葉を聞いている。

「遠いと消えたように見えるけれど、手の中ではまだきらきら光って、きっと宇宙の匂いがして。流れ星が落ちてきたら願った未来が約束されると」

光に触れられると。天から零れた光は、こんな底まで届くわけもないのに。

「馬鹿みたいだ」
憧れていた。光の近くへ行きたかった。触れたかった。いや。ただ、その笑顔を守りたかった。高く高く。翼があれば、どこまでも飛んで行けると思った。でもそれは違う。星に手が届く前に太陽に焼かれ地へ落ちた。蝋の翼を焼かれたイカロスのように。
僕に翼は無かった。
「流星体は、目に見えない細かい粒子になって地球に降り注ぐ」
静かな語り出しで、伊奈帆が言葉を紡いだ。声はいつもの長ったらしい講釈よりずっと小さく、そして柔らかい。こんな声も出せたのか。
「願いを叶えるのは人だ。そしてその多くは欠片のように砕け叶わず形を失う。でも」
大地を覆う花を、葉を、雪を想う。はらはらと風に揺れ、手の中でいつしか砕けて消えてしまう地球の涙を想う。
「見えなくなっても、そこにあるんだ」
大気の底に降り積もる塵の欠片が願いを持ってそこに宿るなら。一瞬だとしても、祈りの光が届くなら。
「願った人の想いは、そうやって大気に溶け込んでいるんじゃないかな」
同じ空の下。同じ星の下。ただ貴方の笑顔を願う祈りもいつしか届くだろうか。

逆立ちの目が合って、僕らは笑った。こいつと一緒に笑う日が来るなんて知らなかった。かつて悔恨しかなく、今この時を知り、未来をこの男の瞳の奥に探す僕がいる。

「お前にしては、情緒がある」

伊奈帆は握った手でトン、と僕の肩を叩いた。それだけ。減らず口も言外の意思の疎通も、いつの間にこんなに自然にするようになったのか。

星屑の底。降りしきる星の雨を地球に凭れて二人で浴びる。世界に二人だけ。そんな言葉が浮かんで消える。

「星だって、昼間は見えない。けれどそこにあるだろう?夜の闇が深いのは、夜が星を好きだからだよ」

闇は光を抱き、光は闇を照らす。

「そういう話を、誰かにしたことがあるのか?」

きっと姫様は、こういう話が好きだろう。地球の青空の下、二人でそんな話もしたのだろうか。

伊奈帆はくすりと笑って腕と足を大の字に投げ出した。今なら分かる。この仕草の意味。冷静沈着で大人びた風に見せかけて、言うこともやることも、真夏の子どものようなのだ。

「君だけだよ。自分でも驚いてる」

僕はかつて地球を見下ろし、空を語った。彼は地球の海の上で空を語った。あの人の瞳には、ど

んな空が映ったろう。
「変なやつ」
照れ隠しにそう言うと、伊奈帆が僕の名を呼んだ。もう今では、面と向かって彼一人しか呼ぶことのない四音の発声。彼の声は後ろの三音に地球の匂いを宿して僕には聞こえる。降りしきる音と、生き物の匂いがする水の粒。
「僕だけじゃないさ」
何が、と目を見る。右目は衛星の点滅のように瞬き、そしてまた星を映す。
「降る星に、同じこと祈るのは」
願い事を三回。信じることをやめた言い伝え。でも、今この互い違いに寝転び瞳に星を宿す男が語り得ぬ願いを持ち得ているのなら。真昼の男が夜を渡り闇の中で星を見出し祈るなら。
「星に願いを、か」
僕の声に続く伊奈帆の声。
「星に願いを乗せるんだ」
桜のように。紅葉のように。雪の結晶のように降る星の欠片を大気の底で浴びる。一筋の光に思いを込める。たとえそれが星ではなくても。
「空は続いている。どこまでも」

春に咲く花や夏の砂浜。秋の黄昏や冬の日だまり。大気に守られ光の中で、空は無限に繋がっている。同じ星空を見上げているだろう大切なあなた。

今この空の下。星に願いを。

あなたに届けたい流れ星

また一つ。急いで願い事を口にするけれど、もたついて今度は二回目の途中で光が消えてしまった。

地球の大地を踏みしめて、吹く風に髪を靡かせ私は祈る。もう十を過ぎた流れ星へのお願いは、まだ一度も成功していない。

「あ、また！」

もう。私はこういう余計な一言が多いから、いつも言い切れないのに。流星群と呼ばれる星の贈り物。こんなに沢山の星の欠片。でも、これが最後かもしれない。この一つで終わりかもしれない。そう思うと気が急いて、やっぱり最後まで舌が回らない。

きゅ、と握る手の中の少し凹んだ木の感触を確かめる。閉じたまま両手で握りしめていたから、手汗で少し柔らかい感じがした。別れの日、姫様から頂いたお守り。私は、美しい装飾がところどころ擦れた縁を撫で四角い蓋を開く。初めてこの箱を開けた時は、中から宝石箱を傾けたように音が次々零れてきて、とても驚いたのを覚えている。その曲の名前を教えてもらった。

「星に願いを…」

ぽろぽろと丸く零れる音の連なりは涙でできた真珠のネックレスのよう。祈りの歌を耳に抱いて、私はまた流れ星に目を凝らす。お願い。お願い。流れ星。どうか私に願いを届けさせて。

そして瞬く星を見つけた。私は光を追いかけ口を開く。星よ、歌よ、この願いよ。どうかあの人のいる空の下へ。

あなたといつまでも同じ星空を見上げていられますように。

星に願いを

星に願いを乗せるとき
あなたが誰であろうとも
心から望むなら
きっと願いは叶うでしょう

心から夢見ているのなら
夢見る子どもがするように
星に願いを乗せるなら
叶わぬ願いはないのです

愛し合う二人が
言わずに仕舞った憧れを
運命は優しく
美しい思い出にしてくれます

星に願いを乗せるなら
天が落ち青い空が割れようとも
きっといつの日か
夢を叶えてくれるのです

あとがき

この本を手に取っていただき、ありがとうございます。このあとがきを書いているのは話題のプラネタリウム鑑賞後四日目の平日出勤前の早朝です。いかにプラネタリウムの衝撃がメテオだったかお分かりいただけますでしょうか。暇さえあれば狂ったように曲を聞き込み血眼になってレポを探す。アルゼロ民のレポのクオリティの高さと正気の失い方は本当にすごい(尊敬の念)です。終了までにあと何回か突したいと思っています。というか行きます。

プラネタリウムの後は界塚団地に聖地巡礼させてもらいました。夕方近くの少し冷えた風と曇りがちの空が薄っすらオレンジへ変わっていき、桜も少し咲いていて…。人気のない公園には座面の冷えたブランコとベンチ。背後に見える給水塔。…もう何というか、伊奈帆とスレインがいました。幻覚？いや、確かにいた。私には見えた…！という二次元トリップが身をもって体験できるので、プラネタリウム→界塚団地コースはおススメです。乗り継ぎに不慣れな私を颯爽と聖地へ連れて行ってくれたかなたさんがハイパークールですごいスパダリでした。一眼を構える姿にすごい界塚みを感じてトゥンク…です。

最後の意訳はちょっとアレンジしすぎかなとも思いましたが、美しい思い出はどうしても入れたいなって思ってああいった仕上がりになりました。

スレインを大切に想う人は彼の語った青い惑星に恋をして、星に祈り、美しい思い出を胸に未来へ歩むのかなという希望を抱きました。星の断章でした…。

◇イメージソング
「君のいない夜」
「明日は来るから」
「This is my love」
「Begin」

東方神起さん

四方山話にお付き合いいただきありがとうございました。次の本でもお会いできますように。

鳴海

星に願いを

発行　Scramble/鳴海
発行日　2019.6.2/ZEROの方舟Osaka04
印刷所　（株）しまや出版様

Mail　jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter　@narumiblue
PixivID　narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。